



未来の価値

人工授精

春日信彦

カウンセリング

糸島富士のふもとに、昨年5月に建設された安部医科大学は9月に開校し、現在、医科大学の東側では付属病院が建設されている。拓也は数学教授として応用数学を一年次の学生に教えている。拓也の体調は勤務する上では問題ないが、心のケアを続けていないと、勃起不全は完治しない。理事長である安部ドクターは拓也のカウンセリングのために、2週間に1回程度東京から糸島にやってくる。拓也にとっては、ドクターは医者というより友達だ。ドクターも拓也の心を癒してあげられるのは自分しかいないと承知している。

拓也はいつものように理事長室にやってきた。拓也は患者として数回カウンセリングを受けているが、本人としてはあまり効果がないと思っている。今日はカウンセリングを受ける前にいつも心の底でくすぶっている疑問をぶつけることにしていた。グリーンのソファに二人が向かい合って腰掛けると、拓也はゆっくりとドクターに声をかけた。「最近はどういうわけか、気分がよくてね。誰かとしゃべりたい気分だよ」

ピンクのポロシャツにブルーのゴルフズボンのドクターは、両手を頭の後ろで組み後ろへのけぞりながら、笑顔を作り答えた。「オ～それは良かった。少しはカウンセリングの効果が出てきたかな。はるばる、東京からやって来た甲斐があったというものだ。それで、何か話したいことでもあるのかい？」ドクターは頭の後ろに組んでいた両手をほどくと、両手を両膝の上に置いた。

拓也は黒い手提げ鞆の中から二つ折りの将棋版と駒を取り出した。「今日は気分がいいから、一局やろうと思って持ってきたよ」拓也は将棋版を黒檀のテーブルに広げると箱から駒を取り出した。「さあ、やろう、こんな気分は久しぶりだ」拓也は駒を並べ始めた。ドクターも急いで並べ始めた。「じゃんけんで決めよう、最初はグ～、じゃんけんポン、よし、俺が先手だ」拓也は笑顔を作り7六歩と駒を進めた。

ドクターはしばらく駒を見つめ8四歩と居飛車の戦形を取った。拓也は久しぶりの駒の音に気持ちが高ぶった。次の一手はすでに決まっていたが、ドクターとの会話を楽しみたかった。「ドクター、人間の言語中枢の発達は、遺伝によるものですか？それとも、成長過程における親の教育によるものですか？」拓也は唐突な質問をしたが、ドクターは拓也の心のケアを考えると、軽やかな声での質問を大いに歓迎した。

「その課題は、医学や教育学では必ず取り上げられます。成長過程における親の教育が言語中枢の発達を左右する、と多くの学者が発表しています。確かに、この見解には多くの実験結果の裏づけがあります。しかし、私は言語中枢の発達は親の教育以上に、遺伝が大きく作用していると考えています。確かに、言語は遺伝しません。このことは赤ちゃんが話せないことから、たやすく分かりますよね。ところが、同じ条件の下に学習させても記憶量に個人差が出ます。俗に言う、頭がいい人、悪い人ですね」

ドクターはゆっくりと拓也の理解を確認しながら話した。「僕もドクターの意見と同じなんです。というのも、ドクターのお父様もご兄弟も、T大をご卒業なされています。さらに、親類に多くのT大卒がいらっしゃることは、マスコミで話題になっていましたね。やはり、言語中枢の発達は遺伝だと思います」拓也は言い終えると6八銀とさした。ドクターはじっと駒を見つめ三四歩とさした。

「いろんな分野における科学者の家系を調査すると、そういう場合が出てきます。確かに、調査の結果、T大生の多くは親もトップクラスの大学を卒業しています。一方では、そうでないT大生もいます。このことは、親の教育によって言語中枢が発達したといえます」拓也は大きく頷くと静かに7七銀と駒を動かした。「天才と言われる人はどうですかね？」拓也は天才に興味を持っていた。

「天才については研究の手がかりがないですね。天才も狂人も突然現れますから。精神病院にも天才がいますよ。私は魔女と呼んでいます。ハハハハ・・・」拓也も少し顔をゆがめて作り笑いをした。「ドクターどうぞ」拓也が勧めるとドクターは即座に6二銀とさした。拓也は目をパチクリさせ、しばらく黙っていたが、質問を続けた。「心についてですが、理性は普遍的なものですか？」

意表を突いた質問にドクターの目がギョロリと動いた。「人間は将来の夢を抱くとき、あるいは愛する人を守ろうとするとき、理性を必要とします。理性は人間集団が作り上げた、生きていくうえで必要な社会的な自制心です」ドクターが話し終わると拓也は5六歩とさした。「たとえば、もし、自分が明日の5時に必ず死ぬと分かっていたならば、理性は必要ないですか？」拓也は極端な条件設定をした。ドクターは唇の右端を少し引き上げると5四歩とさした。

「それでは、分かりやすく説明します。先生が殺したい人がいます。おそらく、将来の夢があり、愛する人がいる先生は、他人を殺すことはありません。ところが、先生は明日の5時時に必ず死ぬ。そのことが分かっていたならばどうでしょう？先生は明日の5時に必ず死ぬわけですから、将来の夢を持つことができません。また、愛する人もいなかったとします。このとき理性を必要としますか？」ドクターは拓也を見つめた。

「もしかしたら、僕は殺人を執行するかもしれません。恐ろしいことですが」話し終わると拓也は6六銀とさした。「私が言いたいことは、将来の自分のこと、あるいは愛する人のことを考えるときに理性が生まれてくるのです。また、理性は人の集団が作り出すものです。ご存知のように、宗教、道徳、法律は地域によって異なります。したがって、自分の理性が唯一正しいと決めつけると、他人の理性を否定することになります。ここが難しいところです」ドクターは一呼吸おいて8五歩とさした。

「だから、争いが絶えないんですね。人類は“共生”を可能にする理性を創り出せますか？」拓也は人間の理性を疑っていた。拓也は七七角とさした。「人類誕生後、長い歴史において創り出せませんでした。いまだ、戦争は世界各地で起きています。今後の人類が創り出せる事を期待する以外ないでしょう」ドクターは話し終わると白い指先に駒を挟み、4二玉とさした。

「ドクターの理論が、その理性を創り出すのに大いに役立つといいですね」拓也は駒音高く5八飛とさした。「ところで、ドクターは精子バンクをどのように考えますか？」拓也は心の底にくすぶる悩みを打ち明けることにした。これは拓也の悩みと察知し、背筋を伸ばし丁寧に返答した。「人類を考える場合、生命の誕生までの過程とその誕生後の育成に分けて考えましょう」ドクターは3二玉とさすと話を続けた。

「今、世界には精子を必要とする多くの女性がいます。先生が一番関心を持たれている点は、精子の提供における倫理だと思います」拓也は大きく頷き少し前かがみになり、ドクターを見つめた。「そこなんです、たとえ、僕の精子を高く買ってくれたとしても、愛してもいない女性に提供する気になれないのです。ドクターはどうですか？」拓也は4八玉とさした。ドクターはしばらく盤面を見つめると5二金右とさした。

「精子の提供を否定しません。現に私は提供しています。むしろ、精子を購入する女性の倫理が大切ではないかと思います。優秀な精子、たとえば、ノーベル賞、フィールズ賞受賞者の精子を買い求め、子供を生み、育てることは悪いこととはいえません。しかし、男性の意思を必要とせず、女性の意思のみで出産された子供は、親への愛の形成においてつらい葛藤を伴うことでしょう」

ドクターは淡々と意見を述べた。拓也は自分の気持ちを爆発させた。「生まれてくる子供のことなんです。いいたいことは。やはり、両親の愛情のもとに生まれて、初めて子供は人間としての愛を形成できると思います。娘がいますが、離婚した後もいつもその子のことを考えています。これが親ではないですか。また、当然の義務ではないですか」拓也は少し早口にしゃべってしまった。盤面に眼を落とすと三八玉とさした。

ドクターは拓也の意見に賛同するように笑顔で返答した。「確かに、子供の成長において親の役目は、この上なく重要です。だから、親の義務をもっと考える必要がありますね」ドクターは四二銀とさした。拓也の口から堰を切ったように言葉があふれ出た。「自分の子供は死ぬまで愛し続けたいのです。知らない女性が、知らないところで、自分の子供を育てていると思うと、とても不安になります。やはり僕には・・・」拓也は五五歩と仕掛けた。

拓也は悩みを打ち明けたことで少し気分は良くなってきたが、将棋をさす気力がうせてきてしまった。ドクターが同歩と指すとポンと膝を叩いて勝負をやめた。「勝負はお預けということで、明日、みんなでランチしませんか。是非、遊びに来てください。自宅にはアンナ、さやか、亜紀がいますから久しぶりにみんなで騒ぎましょう。お待ちしております」ドクターが頷くと、拓也は将棋盤と駒箱を鞆に入れ部屋を出た。

拓也の決断

アンナはリビングのソファに腰掛けぼんやりしていた。その隣ではさやかがチーズケーキを食べていた。アンナは最近ダイエットのため甘いものを避けている。さやかは体質的に甘いものを食べても太らない。アンナが拓也と結婚を誓って一年が過ぎた。二人は入籍し実質的に夫婦となった。拓也家には拓也、アンナ、亜紀の三人と居候のさやかがいる。さやかはアンナの希望で居候している。

アンナはいまだ妊娠していない。拓也の勃起不全がまったく良くならないからだ。良くなる兆候さえ見られない。アンナの不安は募るばかりであった。このまま勃起不全が良くならなければ、子供ができないことになる。アンナは子供がほしかった。アンナはさやかがかつて言っていた人工授精を思い出していた。「アンナ、少しぐらいだったら、いいんじゃないの？」さやかはケーキを勧めた。

アンナはここ最近、うつ症状に陥り、ぼんやりする日が多くなっていた。さやかの言葉も耳に入っていなかった。「アンナ、聞いているの？」さやかはアンナの右肩をポンと叩いた。「え！なんか言った？」アンナはとろんとした眼でさやかを見つめた。「アンナ、あまり考え込むと身体に悪いわよ。といっても、拓也の症状がいつこうに良くならないということは問題だよ。もうこれ以上は待てないよね。アンナ！」さやかはアンナに決心を促した。

「本当に、いつまで待てばいいのよ。いつになったら子供ができるのよ。拓也のおおバカやろう。どうして起たないのよ～」いつものぼやきが始まった。「アンナ、もうあきらめよう」さやかは人工授精を勧めることにした。「いやよ、子供は絶対にほしいの！あきらめないから」アンナはさやかをにらめつけた。「アンナ、そうじゃなくて、拓也のあそこをあきらめるってこと。人工授精をやりなさい。拓也に決心させるのよ」さやかは握りこぶしを作ってアンナを激励した。

アンナも拓也のあそこをあきらめかけていた。まったく、勃起しないのだ。時々、マッサージするのだが、まったく反応がないのだ。他に身体的な原因があるのではないかと人間ドッグの検診を試みたが、別に問題となる病気は見当たらなかった。一年経っても反応がないというのは、かなりの重症で回復の見込みがないと思えた。もはや、アンナの心は壊れかけていた。絶望感からウツに陥ってしまった。

「そうよね、もう待てないよ。拓也に頼んでみようか？そう、明日、ドクターが遊びに来るって拓也からメールがあったのよ。ドクターにも相談しようかしら」アンナの表情がパッと明るくなった。「アンナから言いにくかったら、さやかが頼んであげようか？」さやかは助け舟を差し出した。「そうね、こういうことはさやかのほうがうまくいくような気もするわね。さやか、お願い！拓也をうまく丸め込んでちょうだい。一生、恩にきるわ」アンナは顔の前で両手を合わせた。

翌日、ドクターは中洲のワシントンホテルからタクシーで11時半頃やってきた。ドクターはドアのインターホンを軽く押した。ピンポンと鳴ると亜紀が飛んで迎えに出た。亜紀は久しぶりにドクターを見て少し恥ずかしそうにしていた。ドクターは笑顔を見せると腰をかがめて挨拶をした。「亜紀ちゃん、こんにちは！とても元気そうで良かった。はい、お土産！」ドクターはキャナルで買ったシュークリームとバームクーヘンが入った袋を手渡した。

亜紀は左手に袋を下げ、右手でドクターの左手を掴んで嬉しそうにリビングまで引っ張ってきた。ドクターが入ってくると、拓也、さやか、アンナが笑顔でドクターを歓迎した。「いらっしゃい、ドクター！待ってたわ」アンナは元気よく挨拶した。「お土産、もらった」亜紀はアンナに手提げ袋を手渡した。アンナはお礼を言うとキッチンにみんなを案内した。

テーブルにみんなが着くとアンナとさやかは前菜とコーンスープを運んできた。スープを飲み終わるとメインディッシュの伊万里牛のステーキを運んできた。亜紀が大きな声で叫んだ。「やったー、おいしそう！」亜紀は家族のムードメーカーになっていた。「ドクターも亜紀の笑顔に応じて大きな声で叫んだ。「ワオ！ワンダフル！」ドクターはめったに見せないおどけた表情を見せた。ドクターは独身で女性は苦手であったが、亜紀を見るとなぜか心が和んだ。

食事を終わるとアンナはドクターが持参したシュークリームを小皿に取りみんなに運んだ。「亜紀、シュークリーム大好き！先生、ありがとう、頂きま〜す」亜紀はお礼を言うと大きく口をあけてかぶりついた。シュークリームは拓也も大好物であった。「ドクター、このシュークリーム、バリウマ」拓也は子供のように口をもぐもぐさせていた。「亜紀はホットカルピス、みんなはコーヒーでいいかしら」アンナは飲み物の準備を始めた。

ドクターは元気に育っている亜紀を見てほっとした。「亜紀ちゃんは今度二年生になるんだね。大きくなったら何になりたいのかな？」ドクターは亜紀とお話したくなった。「亜紀は〜、AKBになりたい」亜紀はAKB48の大ファンになっていた。「え！AKBってなんだい？」ドクターはAKBを知らなかった。女性に弱いドクターは、アイドル関係はまったく知らなかった。「ドクター、AKB知らないのか、もう少し、世間を勉強しなくっちゃな、ね、亜紀」拓也は亜紀にAKBについて教えてもらっていた。

「AKB48はモーニング娘やおニャン子クラブを超えるエンターテイナーなんだよ、日本のSKE48、NMB48、HKT48、ほかにジャカルタや上海にもユニットを作っているんだ。今や、秋元プロデュースは世界を席卷しているんだよ。ドクターもAKB48のかわいい彼女たちを見れば、きっとファンになるよ」拓也は亜紀から聞いた話をドヤ顔でドクターに教えた。

かつては芸能オンチだった拓也が亜紀の父親になって、急に芸能通になった。そのことに、ドクターは驚き眼をパチクリさせた。「へ～、先生が芸能通になったとは驚きだ。いったい、誰に教わったのですか？」ドクターは冗談を言った。「すべて、亜紀ちゃんに教えてもらったんだよ。亜紀ちゃんは芸能通で、物知りだよ、こっちが感心しちゃうよ」拓也は亜紀が思っていた以上に賢いことに驚いていた。

ドクターは笑顔で頷き、亜紀の笑顔を見つめた。「亜紀ちゃんは、かわいいから、きっと、AKBになれるんじゃないかな」ドクターは適当に話を合わせた。「それと、かわいいドレスを着たお嫁さんにもなりたいな〜」亜紀はアンナのウエディングドレスを見てあこがれていた。「なれるとも、かわいいお嫁さんに、きつとなれるよ」ドクターはなぜか口が軽くなっていた。いつもは、冗談を言わないドクターが亜紀の前では朗らかになるのだ。

「あ、それと、妹が欲しいな〜」亜紀はアンナの方に顔を向けた。アンナはなんと言っているか分からず、下を向いてコーヒーをすすった。「亜紀ちゃん、もう少し待っていたら、できるからね」さやかは亜紀に向かって返事した。アンナは急に顔を持ち上げるとさやかを睨みつけた。「ドクター、早く子供ができる方法がありますよね。拓也も早く子供ほしいでしょ。アンナも亜紀ちゃんも待っているのよ」さやかは人工授精をほのめかした。

ドクターと拓也はしばらく黙っていた。二人は人工授精のことを暗示していることはすぐに察知した。拓也はここ最近自分の症状に諦めを感じていた。いっこうに良くなれないからだ。拓也はいずれ人工授精の相談をしようと思っていた。まさか、この場でさやかに人工授精を仕掛けられるとは度肝を抜かれた。拓也は何か返事しないとアンナにとっても悪いように思えて少し歯軋りをした。

突然、亜紀が話しはじめた。「早くできる方法があるの？だったら、はやくほしい！ほしい、ほしい」亜紀が大きな声でみんなに叫んだ。さやかは拓也を見つめると即座に声を添えた。「ほら、亜紀ちゃんもこんなにほしがっているじゃない」さやかはドクターの顔色を窺っていた。ドクターが拓也の顔をちらっと見た。拓也は声の出ない口を少しあけたあと、元気のない声をだした。

「そうだね、早く子供がほしいね、よし、決めた」拓也はアンナの顔を見つめ笑顔を作った。ドクターは怪訝な顔を見せたが、アンナはゆっくりと笑顔を作った。それを見たさやかは明るい声で叫んだ。「良かったわね、アンナ、亜紀ちゃん、もうすぐしたら、家族が一人増えるわね」さやかは亜紀の肩をポンと軽く叩いた。亜紀はスッと立ち上がるとバンザイしてジャンプした。

拓也はドクターに顔を向けると小さな声で話しはじめた。「ドクター、決めたよ、今後のことはよろしく。病院には必ず都合をつけて通うから、成功するよう、頼むよ」拓也は人工授精が成功することを心から願った。「分かりました、早速、病院のほうには連絡を取ります。必ず成功させますよ、安心してください、アンナさん」ドクターはアンナに向かって大きく頷いた。アンナはドクターに向かって軽く頭を下げた。

亜紀は突然立ち上がるとアンナに声をかけた。「紗枝ちゃんところに遊びに行ってくる」亜紀は言い終わるとキッチンを飛び出して行った。さやかは玄関のドアが閉まる音を確認すると拓也に御礼をすることにした。「拓也、本当にありがとう。アンナに代わってお礼を言います。アンナ、本当に良かったわね」さやかはアンナの安心した笑顔を見て小さな涙が落ちた。アンナの目元も潤んでいた。

さやかはハンカチで涙を拭くと、もうひとつアンナに頼まれていた話をすることにした。「突然の話でごめんなさいね、すぐそこに平原公園があるでしょ、そこで思い立ったのが、小さなお店を出してはどうかしらとアンナが言っているの、拓也はどう思う？」拓也はよく意味が飲み込めずにアンナの方に顔を向けた。アンナは少し間をおいて笑顔で話しはじめた。

「何か仕事がしたいの。ここ一年何もやってないでしょ、ぜんざい、団子、タイヤキなどを出す甘党の店をやってみたいの、どう、やってもいい？」アンナは真剣な顔でお願いした。拓也は返事に困ったが、小さく頷いた。「かまわないけど、以前にやったことがあるのかい？」拓也はアンナに商売ができるとは思えなかった。「やったことはないけど、とにかくやってみたいの、いいでしょ」アンナは両手を合わせてお願いした。

拓也はどのようにやっていくのかは皆目見当がつかなかったが、了承した。「アンナさんがやってみたいというのなら、僕がかまわないけど、僕は役に立たないと思うよ、それでもいいかい」拓也は何も手伝いができないことをあらかじめ伝えた。アンナは笑顔を作ると両手をポンと叩いて立ち上がった。「拓也には迷惑はかけないわ。さやかと二人でうまくやって見せるから」アンナはテーブルを片付け始めた。さやかも立ち上がると、拓也とドクターはリビングに向かった。

未来の仲間

拓也とドクターはいつの間にか出かけてしまった。アンナとさやかは食事の片づけを終えるとリビングでくつろいでいた。人工授精を快諾してくれた拓也のことを思っているアンナは笑顔でのほほんと庭を眺めていた。さやかは思ったより簡単に拓也が承諾したことが腑に落ちなかったが、結果オーライになったことで肩の荷が降りた。「アンナ、良かったわね、拓也も子供がほしかったみたいね」さやかはここ最近にないアンナの明るい笑顔を見てほっとした。

アンナの頭の中はもはや妊娠気分になっていた。「早く、妊娠したいわ。ドクターちゃんやってくれるかしら、待ち遠しいわ」アンナは下腹部を何度もなでていた。「アンナ、きつとうまくいくわよ、われわれの仲間をどんどん増やしてよ、アンナ」さやかは地下組織の仲間が増えることを考えていた。「どんどんたって、まだ一人も産んでないのにせつかちね、でも、三人はほしいな〜」アンナは三人の子供に囲まれている自分を頭に描いていた。

「ところで、亜紀は本当にAKBのオーディションを受ける気かしらね」アンナは食事のときの亜紀の言葉を思い出していた。「亜紀はしっかり勉強してもらって、さやかの跡継ぎになってもらわないといけないわ。芸能人はあきらめてもらわないとね」さやかは一方的な理解に苦しむ発言をした。アンナはさやかを怪訝な顔で見つめると訊ねた。「亜紀を仲間にするって、いつ決めたのよ？」

さやかは眼を細めてニコツと笑顔を作り答えた。「拓也に亜紀を預けたときからよ、われわれの仲間にするために亜紀を拓也に預けたってわけ」さやかは亜紀を拓也に預けた理由を始めて打ち明けた。あっけにとられたアンナは眼を大きくして驚いた声を上げた。「え！そうだったの、どうして亜紀を仲間にしようと思ったの？」正面のさやかに向かって身を乗り出した。

さやかは腕組みをするとドヤ顔で話しはじめた。「それは直感よ。亜紀はかなり頭がいいと思ったの。きっと秀才になるに違いないと直感したのよ。間違いなかったわ。亜紀はすごく物覚えがいいでしょ。運動神経もいいし」さやかは自分の眼に狂いがなかったことを自信たっぷりに話した。二年ほど前のことだが、亜紀が入院している間にさやかは彼女の家系を調べた。そのとき、亜紀の祖父は高校の数学教師であったことを知った。そのとき、亜紀を仲間にする決心をした。アンナはさやかの意外な考えに驚くと同時に不安になった。「ま〜、確かに亜紀は賢い子よ、でも、亜紀を仲間にしなくてもいいじゃない、亜紀は自分の好きな道に進めてあげたいわ」アンナはさやかの強引な考えに反対した。

「アンナ、無理に仲間に入れようってわけじゃないのよ。亜紀が成長するにつれて、さやかが少しずつ洗脳しようと思っているの。きっと、立派なリーダーになれるはずよ」さやかは仲間に入れる計画を立てていた。「反対はしないけど、亜紀の気持ちも考えてあげてよ、さやか」アンナはさやかの考えが良く飲み込めなかった。「アンナの子供まで仲間にするってことはないでしょうね？」アンナは不安が膨らんだ。

さやかは間髪いれず答えた。「アンナ、仲間にしようよ、たくさん産んで仲間を増やすのよ」さやかは当然のように話した。アンナはあきれた顔で答えた。「アンナの子供はアンナが決めるわ、さやか、いい加減にしてよ」アンナはさやかの独断的発言にキレた。さやかはアンナの怒った顔を見て肩をすくめ、下を向いた。アンナは怒りが収まらず、さらに話し続けた。「そんなに仲間がほしけりゃ、さやかがどんどん産めばいいじゃない、そうでしょ」アンナの顔は夜叉になっていた。

さやかはしばらく下を向いて黙っていた。ゆっくり顔を持ち上げると淋しそうな声で話しなじめた。「それがダメなの、さやかの卵は使い物にならないの」さやかは妊娠できないことを打ち明けた。「ダメって、どういうことよ？」アンナは意味が良くつかめなかった。

「ずっと前に、ドクターに調べてもらったの。さやかの卵子を。すると、たとえ受精しても細胞分裂できない卵と言われたの。だから、さやかは子供ができないのよ」さやかはまた肩を落として下を向いてしまった。

アンナは具体的な意味が良くつかめなかったが、子供ができないといったことにショックを受けた。「え！子供ができないの、不妊症ってこと？」アンナは意外な告白に戸惑ってしまった。「そうなの、絶望的な不妊症らしいの。子供は一生、できないみたい。あきらめる以外ないの」さやかは自分の覚悟をさらけ出した。アンナはいったいこの後なんと言っていていいか分からず、声の出ない口を金魚の口のように動かした。

「そんなこと、今頃言うなんて、もっと早くに打ち明ければ、気が楽になっていたのに。さやかもバカよ」アンナの眼からは涙がこぼれ落ちていた。さやかはスッと立ち上がりアンナの横に立つと、ポンと肩を叩いてハンカチを手渡した。「アンナ、お買い物に行きましょう。ベビー服を見に行かない、わくわくしてきたわ」さやかは自分に子供が生まれるような気分になっていた

。

そのころ、拓也とドクターは平原公園を散策していた。拓也は、昨日、ドクターが拓也の控え室にやって来て、深刻な顔をして話した内容について思いだしていた。ドクターは拓也が一週間前に受けた人間ドックの結果を報告した。「先生、この前の人間ドックの結果ですが、ひとつ気にかかることがありました。ちょっと、いいにくいのですが、いずれ報告しなければならないことですから、今、話します。前立腺に腫瘍がありました。悪性腫瘍と思われます。今後の治療を相談したいのですが」

拓也は並んで歩いているドクターに昨日の話をもう一度確認した。「僕はガンですね。治療しなければ、死ぬんですね」拓也は死の予感を感じた。地獄からの使者は拓也を迎えにすぐそこまでやって来ていた。

未来の価値

<http://p.booklog.jp/book/65929>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65929>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65929>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ